
交錯する魔法と護衛

天宮翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交錯する魔法と護衛

【Nコード】

N4726P

【作者名】

天宮翔

【あらすじ】

暁東市の二階堂家にボディガード候補生として住む朝霧海斗は旅行前日に風邪を引いてしまった。そして、中里亮から共に育った杏子の存在を知らされる。杏子は今、禁止区域にいると聞かされ、更に衝撃の言葉を聞かされた。海斗は高熱を出しながらも禁止区域へ向かう。そしてそこには、亮が用意した禁止区域の人間が。そして海斗は力尽き、止めを刺されそうになる。その刹那、海斗を包むようにして青い光が溢れる。そして、光が収まると朝霧海斗は禁止区域から消えていた――

第00話「プロローグ」

——暁東市。

人口約230万人を誇る国内有数の都市。

大手企業が本社を置き、同時に裕福な資産家が多数住居を構えており、様々な防犯対策を施している事から、日本で最も犯罪の少ない街とされている。

市内には多数の資産家が住むエリア（高等区）が存在し、防犯上の理由からエリア内には関係者しか入る事ができない。

一方で、市内には禁止区域があるため、その周辺エリアは薄暗い雰囲気を纏っている。

そんな都市の高等区にある青年がいる。その青年はあるきっかけで資産家の内でも一、二位を争う二階堂家のボディーガードを務めることになった。

「なかなか熱、下がらないな……」

青年は二階堂家の一室で寝ていた。

青年の名は朝霧海斗。

ボディーガード育成学校である^{れんおうがくえん}憐桜学園に通う二年生。

そして、隣には彼の護衛対象は二階堂麗華と言うこの屋敷の長女である。

二人はある件について言い争っていた。

「明日から旅行の予定だけど、延期させましょうか？」

「やめてくれ。俺ひとりのために予定を変えるな」

海斗たちは明日から旅行に行くことになっていたが、旅行前日、海斗は風邪を引いてしまった。

現在でもかなりの熱を出し、喋るのがやっとだと言うのに彼は平然としている。

麗華はそんな海斗の言葉に悲しげな顔で海斗に言った。

「それはそうだけど……」

「幸い、旅行に行く連中は侑祈や尊、薫たちだ。俺抜きでも十分楽しんでくれるだろ」

だが、海斗はそう言い返す。

けれど、ある点に置いて、海斗だけをこの家に留守番させて置くの危険だ。お父さまは海斗を嫌っている。だからこそ海斗にその点を指摘する。

「さすがに、お父さまの印象が良くないし……」

「だからって中止に出来ないだろ」

「なら、やっぱり事情を説明して延期を——」

「僕がお供いたします。麗華お嬢様」

延期を決行すると断言しようとする刹那、扉が開き、もうひとりのボディーガード中里亮が部屋に入ってきた。

麗華は突然話に関わってきた亮に厳しく当たる。

「ちょっと、何勝ってに入ってきてるのよ」

だが、亮は特に気にすることなく麗華にお言葉を返す。

「メイドからお聞きになりませんでしたか？ 海斗の風邪が移ってはいけないので、部屋は立ち入り禁止だと」

「ふん。ここは私の屋敷。私の勝手よ」

「ですが、僕は麗華お嬢様のボディガードです。従ってお供することは自然なことではないでしょうか」

亮のその言葉に麗華は何を言っているのと、不思議な顔で亮に言った。

「あんたが最初、旅行には行かないって言ったんでしょ」

「ええ。海斗がいましたから。今回のケースの場合は、仕方がないでしょう」

「はあ。息が詰まるあんたと旅行に行って、楽しめるビジョンが少しも見えないんだけど？」

「では、ご命令とあれば、一言も喋りません」

「そう言うことじゃなくって……」

麗華はこめかみをピクピクさせながら亮を睨む。ところがずっと口を閉じていた海斗が、ここで口を挟む。

「麗華」

「なによ、あんたは黙ってなさい」

だが、麗華は海斗に声を掛けられたことに更に不機嫌になる。しかし、海斗は気にせず告げる。

「行って来い」

「だからあんたは黙って——」

「お前も、彩も、その他の連中も、楽しみにしてる旅行だ。皆で楽しんでくれれば、オレも気が楽になるんだよ」

海斗のまさかの返答に麗華は海斗から目を背け、代案を出す。

「少し延期して、あんたも行けば済むことじゃない」

「けどな、今日明日じゃまだ熱は引きそうにもないし、そうすると旅行の宿泊数そのものまで変更しなきゃならなくなるだろ」

「どうして……あ……」

海斗の答えに麗華は目を細めるがあることを思い出した。対して、海斗はその問いに答える。

「俺らの合宿が始まるからな」

「……」

「だから行って来い。旅行なんていつでもいける。それこそ卒業までの付き合いなら、来年の夏もあるだろ」

海斗は明るく、麗華にそう告げた。しかし、麗華はそれでも食い下がる。

「本当にいいの？ 海、経験ないんでしょ」

「来年行こうぜ。それでいいさ」

「……わかった。これ以上、あんたの考えも無駄には出来ないし……。その代わり、お土産持って帰ってくるわ」

海斗の笑みを見て、麗華は頷き、代わりにお土産を買ってくるように言った。

海斗は麗華のその言葉に「そうだな。俺の食ったことないものを頼むぜ」と麗華に言い返す。

そして、切りが良いところで亮が仲介する。

「話はまとまったようですね」

「ええ。行くわ」

「畏まりました」

亮は麗華の言葉に頷く。

それを見計らい海斗は「とりあえず風邪が移る可能性もある、部屋を出た方がいい」と麗華に告げる。

「わかってるわ。辛かったらすぐに人を呼びなさいよ」

「ああ」

麗華は頷き、海斗を諭して部屋を出た。その際、亮がお送りしましょうと告げるも、嫌な顔ですぐさま部屋を後にした。

亮はそんな麗華を見て自嘲を零す。

「いつになったら、打ち解けられるのか……」

海斗は部屋を出ずにニヤニヤする亮をひと睨みし、「何か用か」と訊ねる。

「なんだい？ 用とは」

「何か用件があったから来たんだろ？」

「そうだね。……それは確かに。君に、ひとつだけ確認したいことがあるんだけど」

「確認したいこと？」

改まって亮が訊ねて来たことに少し驚く海斗。そして亮は微笑を零し、告げた。

「杏子ちゃんのことなんだ」

「……互いに過去のことは触れない約束じゃなかったか？」

「そうなんだけどね、今回は事情が事情なんだ」

「そんな例外があることは初めて知ったがな」

そう。俺たちの間には暗黙のルールがあった筈だ。過去の話はしない、それが俺たちの約束事だ。しかし、亮から発せられた言葉は衝撃的なものだった。

あの日以来、連絡すら取っていない杏子の存在についてだった。そして、携帯を取り出した亮。何やら操作を始める。携帯から録音していた会話が聞こえてきた。俺はそれに目を見開く。

『海斗だけが君に触れられるのが、悔しいんだ……。昨日再会して、一瞬で身体が熱くなった。君を抱きしめたくなった。おかしいのかもしれない』

『アキラ……』

「ッ!？」

「一言でわかるだろう？ 誰の声だか」

「デメエ……」

俺は亮を睨みつける。

あれは紛れもなく亮と杏子の会話だった。そして、尚も続く亮と杏子の関係話。

海斗は無意識に体が動き、亮を殴った。

「杏子はどこだ……。殺すぞ……」

「痛いなあ……。プッ。口の中が、切れたじゃないか。久しぶりだよ。君のその殺気。そんなに手放したくないのなら傍に置いておけばよかったのに」

俺は亮の瞳を見据える。

しかし、こいつの言っていることに、嘘は見られない。だが、真

実も見られない。感情の高ぶりから動いたせいで、熱がまたガンガンと上がって来た気がする。

亮はニヤニヤと海斗の焦りを見やる。

「信じられないって顔だね。確かに君を思う杏子ちゃんの心は固い。でもそうだな……」

奴は不適な笑みを浮かべて更に卑猥な言葉が続け様に言い放つ。俺の抑えていた感情は遂に爆発した。

「どこだ——杏子はどこにいる……」

「ふふ。耳元で囁いてあげたよ。海斗は今、禁止区域のある場所にいるってさ。どこだと思う？ 比佐深駅。禁止区域の中枢」

それを聞いて俺は焦りを覚えた。

比佐深駅……。それは、俺や親父ですら通常は踏み入れない場所。禁止区域にしながら欲しいものの全てが手に入る場所。俺がかつて、幼い頃一度だけ踏み込んだ領域。

「なんのつもりだ……」

「僕の仲間がそこにいてね。ちょっと犯してきなよって言ってあげたんだ」

「……全部本当なんだな」

「人の心を読むのは得意だろ？ 僕の目が嘘を言ってるかい？」

亮は、こいつは信用できない。俺を此処から引き離したいと言っていた。

だが、もしもだ。もし……。

その時、亮の携帯に着信が届いた。俺はそれを凝視する。亮は俺の顔を見て笑みを浮かべた。

「どうしたんだい。僕個人のメールだよ？ でも、どうしてもって言うなら、見せてあげないでもないよ。君の知っている人に、よく似てるんじゃないかな？」

向けられたディスプレイ。そこには……。

俺はそれを見た瞬間、亮に飛び掛かった。だが、簡単に避けられる。

そして、突然起きたせいで、強烈な頭痛と目眩に俺は襲われた。

「君は高熱を出しているんだ。無理はしない方がいいよ」

「俺が出て行くことが狙いか……」

「うん。そう言ったじゃない」

亮は心底嬉しそうに笑った。俺は……。

「なら、今すぐ杏子を解放しろ……」

「それは無理な相談だなあ。獣たちを止めることは僕にも出来ないよ。助けたかったら急ぐしかないね。もっとも……この画像だと既に手遅れかな？」

「……」

「僕や男たちが使いまわした後の彼女との再会。ああ、可哀想な杏子ちゃん」

亮の演技掛かった仕草に俺は更に身体が熱くなる。

もがき、立ち上がる。気がつけば、服に手を伸ばしていた。

その時、再び亮が告げる。

「行くのかい？ 禁止区域に。そしたら今度は麗華お嬢さまが危険になる。わかるでしょ？」

俺は一瞬迷うが、亮を睨み扉から退かした。
そして、扉に手を掛け、最後に亮に言い放った。

「俺はもう、二度と戻って来れないんだろうさ……。だが、ひとつだけ覚えておけ。……死にたくなかったら、二度と俺に遭遇しないように生きるんだな」

俺はそう言い残し部屋を去った。向かうは禁止区域――

中庭に出るとメイドのツキに出会う。こいつとも……。

「な、何してるか海斗ッ!？」

「悪いな。今度にしてくれ」

「今度とか、そう言う問題じゃない。海斗は病人」

グッと俺の腕を握り、引き戻そうとする。

「離してくれ。今は忙しい……」

「屋敷内をうろうろするだけじゃなく、外に外出すなんて絶対に認めませんよ海斗」

「やめろ――」

「ひっ!」

ツキは海斗の怒鳴り声に後ずさる。箒が音を立て、地面に倒れた。それと同時にツキが腰を抜かし座り込んでしまう。俺は思わず手

を差し出したが、ツキは一瞬怯え後ろに引いてしまった。

「……悪い。……とにかく、心配ない。お前は、お前のやれることをやってやれ。麗華たちにな。それから旅行を楽しんで来るんだぞ。……じゃあな」

俺はそう言い残し、ツキに、二階堂に別れを告げた。



禁止区域に着く頃には、日が沈んでいた。

俺の足取りは、熱のせいで重い。

また、最近は禁止区域に対する政府の目が厳しい。わかりやすい入り口はすべて、24時間監視体制の下警戒されていたからだ。

どんどんと視界は暗くなっていく。額から汗が目に染み込む。

それでも俺は歩みを止めなかった。禁止区域に着いても懐かしむ余裕なんて欠片もない。

今目指すのは比佐深駅。だと言うのに……。

「戻った早々手荒い歓迎かよ……」

幾つもの突き刺さるような視線。

「そりゃそうだよな。……ここは狩場の一つだ」

俺もこいつらの立場だったからよくわかる。例え情勢下が酷く警

官が見張っていても、ここで生きてる連中には関係がない。

「相手してやるからさっさとかかって来いよ。こっちは時間がない」

俺は廃墟に隠れている連中を挑発し、おびき寄せる。

すると、大群かと思わせるような数の禁止区域の人間が現れる。数にして三十……。大男…金剛とか言う奴が統率している。俺の周りは囲まれていた。そして、金剛と言う大男を見る。

「ボスのお前は、高みの見物か？」

「そいつらは日頃から暴力に飢えててよう。俺がぶっ壊しちまったら、なんにも楽しめねえだろ？」

「ふっ。逃げんなよ。お前には杏子の場所を吐かせる」

「ひとりくらい倒してみな？ げはははは」

金剛は海斗を見下すように笑った。

しかし、海斗にとってはこの程度は意味はない。しかし、それは万全な体調であった場合である。だが、それでも、海斗は多くに敵を倒していく。

「はぁ、はぁ……。っ、く……。！」

片膝をつく。

足が震え、視界も最悪だった。

「なんだ……。なんなんだ、テメエは！」

金剛……。だっけか。目の前の男がなにか、叫んでやがる。もう、上手く聞き取れない。

「三十人はいたんだぞ!? まさか、それを全部……。こいつは、今ここで殺しておかなきゃならねえ! アキラだとか、組織だとか関係ねえっ」

ズンズンと地響きを鳴らすように近づいてくる。

腕は……。足は……。ダメだ、もう動かない。身体は焼け付くように熱い。

頭は今にも割れそうなほどの激痛だった。それでも、目の前の男を倒さなければ、俺は死ぬ……。

「う……。らああ!」

「むうっ!」

蹴りを叩き込む。

しかし、その蹴りを相手の太い腕に拒まれてしまう。蹴り出した足を掴まれ、俺は地面に背中から叩き落された。

「足からぶち折ってやらあ!」

メキメキと逆関節へと圧迫感を加えられる。

「な、なんだ……。固え!」

「こちとら、骨の鍛え方から違うんだよ!」

蹴りを一撃入れ反撃に転じるが逆にラッシュの嵐。

俺は一方的に殴られ続ける。だが、それでも俺は立ち上がろうとする。

それに恐れを覚えた金剛は渾身の一撃を海斗に見舞う。

その刹那、海斗を中心に煌めく青の光が放出する。金剛は出した腕を引っ込め、眩しさのあまり後退した。そして、光が収まり海斗

が倒れている場所をもう一度見ると、海斗の姿はなかった。

第01話「行き着いた先」

「ぐっ」

目の前が暗い。尚且つ頭がクラクラしてやがる。まだ奴らが、奴がいるっていうのによ。

此処で寝てしまったら殺される。

両腕に力を入れるが身体が思うように動かない。海斗は思う。

こんなところで死んでたまるか！

もう一度腕に力を入れると体が浮く。そのまま勢い良く腕のバネを使い、状態を起こした。

「はぁ、はぁ……」

立ち上がるがやはり体が思うように動かない。というよりキレがない。

「くっ……杏子」

だんだんと視界が広がり近くにある柱？により掛かる。

ん？ マテ。柱だと？ というより此処は禁止区域じゃない。

周りを見渡せば、荒れ果てた廃墟の姿はなく生い茂った緑溢れる森だった。

「俺が……死んだ？ そんな馬鹿なことがあるかよッ！ ツ！？」

禁止区域の連中にやられた内臓が、胃が、反転したかのように逆

流し吐き気を催す。

だが、これでハッキリした。痛みがあるということは俺は死んでいないと。

口に含まれた血と胃液が混ざった唾を吐き、一度深呼吸する。

「ふう。……痛みがあるということは死んではない。だが、此処はどこだ……」

海斗はもう一度周りを見渡すもこんな場所は知らない。禁止区域にこんな場所はなかった。それに禁止区域の連中が俺を此処まで運んで捨てる訳がない。

あの世界は死と隣合わせの世界だ。勝者は次の生を繋ぎ、敗者はそこで死ぬ。

そんな世界に死んだ奴を供養するような変わり者はいない。

時間にして夜。日付は変わってないと考えられる。……何だ？
月が二つ？

「おいおい、勘弁してくれよな」

俺の予想が正しければ、此処は異世界。

「そんなの小説の話しだけにしとけ」

ああ、糞ッ。

少しは落ち着いてきたと思えばまた熱が出て来やがった。

“ガサッ”

……草の音？ 何か近づいてくる。
人じゃないみたいだが――

海斗は木の後ろに隠れ、気配を感じる林を見やる。草の根を分けて三体の影が姿を現す。それは……。

（なっ。ロボットかよ）

どうも今日の俺は運氣が悪いみたいだ。と言うより厄日のようだ、糞ッ。

杏子を探すために禁止区域に再び足を踏み込めば、当然のように連中のお出まし。禁止区域退去法案の施行で仕方がないとはいえ、30人以上を相手させらるゝとはな。

っ…熱が……いや。IFなんてものに現^{うつ}を抜かす何て俺らしくないな。

……だけど、杏子の奴は――

海斗は頭を振り、杏子の影を振り払う。今は目先の敵？に意識を集中させる。

その刹那、一線の光線が頬を掠めた。頬から血が流れる。

「おいおい、洒落に……うお」

三体のロボットは散開し、海斗に光線を放つ。しかし、禁止区域で養われた洞察力により紙一重でそれらを避けていく。

「ああ、ウザイ光線だよな全く。だが直線的で読みやすい！」

光線の雨を避けては木を楯に、一体のロボットに鞭を打つかのような鋭い蹴りを入れた。そのひと蹴りは確実に光線を放射する地点を捉え、砕く。

更に右ストレートが繰り出され、蹴りと同じ場所を捉えた。その一撃の反動でロボットは木に激突し、爆散した。

「たゞまやゝ！ つか。なかなか堅いが殴れないこともないか」

手足に異常がないことを確認すると、海斗は残り二体を見据えた。海斗に眠る悪の血がたぎる。相手が人ならば今の彼を見た者は怯むだろう。しかし、相手は機械。感情も何もない。

海斗は獣が如く、光線を避けながら距離を詰めた。

勢いを殺さず膝蹴りで一体目の光線を放ってくる部位を破壊し、軸足を固定してそのまま膝蹴りを入れた脚を伸ばし、弧を描くように一体目を二体目にぶつける。

二体目は光線を放とうとした瞬間に二体目がコースに現れ、零距离で発射。

一体目が爆発を起こし、二体目も巻き込まれ連鎖的に大爆発を起こした。

海斗は掃除を済ませ軽く息を整える。

「とりあえずこれで終わりだよな。……しかし、この世界？ はどうなってやが――」

緊張の糸が途切れたのかそのまま背中から倒れる。ギリギリで受け身は取れたが、熱が相まって激突の衝撃が痛みに変換され、地味に痛みが体を走る。

「イッテーーーーッ！！」

はあ。

体中が熱い。風邪なんて子どもの時以来だったのによ……。身体痛みより風邪への唾を吐く海斗。それから少しづつと

言いながら身体が休息を欲したのか、海斗の視界はブラック・アウトする。

その時、二人の人影が見えなくなかったが、海斗はそのまま意識を失った。

第02話「魔法少女現る」(前書き)

遂に魔法少女登場。

ですが、主人公は意外な行動に出ます。彼らしいと言えば彼らしいですが。

第02話「魔法少女現る」

私こと高町なのはは親友のはやてちゃんが新設した機動六課に入隊する前日、最後の休日をフェイトちゃんと過ごしていた。

そんな最後の休日を楽しく過ごした夜、森林地帯に大隊程度のガジェットが現れたとの報告を受け、その森林地帯に向かった。

「フェイトちゃん！」

「なのは！ そっちは片付いた？」

「三体逃がしちゃったよ。たぶん森の奥に逃げたんだと思うんだけど」

「そう。なら一緒に行こう」

「うん」

私はフェイトちゃんの提案に頷き、夜空を駆けた。すると、少し先で煙が上がっていた。私はフェイトちゃんとコンタクトを取るとフェイトちゃんも頷く。

「あそこに私たち以外の魔導師が居るのかもしれない」

「だね。だけど、魔力は感じなかったけど一体……」

「わからない。けど、慎重に行こう」

「了解」

私とフェイトちゃんは戦闘態勢を保ったまま煙が上がる地点に降り立った。

地上に降りるとガジェットが爆散して散らばっている。どうも、同士討ちみたいなのがひとつと、殴られたようなものがひとつあった。

「なのは。これって……」

「うん。魔法を使わないでガジェットを倒してるみたいだね」

「だよな。けど、ただの拳で殴ったぐらいでガジェットが壊れると思う？」

「ううん。それは難しいと私も思うよ。強化もなしでガジェットの装甲を打ち破るにはかなり骨が折れると思う」

私はそう結論付けるもなんと行って良いかわからない。現場には魔法を使った痕跡がガジェットのものしかない。

その時、少し離れを搜索していたフェイトちゃんが声を上げた。

「なのは！」

「どうしたの!？」

「男の人が倒れてる」

「えっ?!」

私は驚き、すぐさまフェイトちゃんが向かった先に駆けつけた。

そこには、丁度フェイトちゃんが見つけた男の人の状態を起こしているところだった。透き通った蒼い髪に蒼い瞳、端正に整った美しい容姿にスーツ姿の男の子。

長身でひと目見たら忘れることが出来ないほど格好いいと言っても良いかもしれない。

「なのは、彼の体を起こすの手伝って」

「う、うん。わかった」

フェイトちゃんの声に我を取り戻した私は左側に回り、同時に力を入れて男の子の体を起こした。

その際、彼から熱気を感じたけど……もしかしたら。

「フェイトちゃん。この人……」

「うん。なのはが思ってる通りだよ。見つけたときに簡易的だけどメデイカルチェックをして見たら、熱が39度4分あった。それに肋骨に罅が……本格的な医療施設に運ばないと――」

「やっぱり。なら、六課に連れて行った方が早いね。はやてちゃんには私から連絡を入れるから、フェイトちゃんは彼を運べるように……」

「わかったよ、なのは」

私たちは急いで各自割り当てた作業を行う。幸いにもはやてちゃんにはすぐ連絡が付いて医務室の確保がすぐに出来た。

フェイトちゃんも魔法でネットを作って簡易的な担架を作り出し、男の子を乗せた。私たちは急いで六課に飛行する。



「く……。何だ、知らない天井だ」

俺は随分と寝ていたようだ。

禁止区域でこんなに熟睡していれば、もう命はないだろう。しかし、俺は生きていた。……手足は動く。

けれど、まだ体は熱を帯びている――周りを見渡す。

此処は病室のようで、医療機器が充実している。そして、俺はベツトの上で寝ていた。

「……やばいな」

海斗は表情を曇らせた。

どこの誰が病室に医師に俺を見せたかわからないが、身元不明の俺だ。このままでは警察に捕まってしまう。

そう思ったのも束の間、海斗はあるものを見つけた。

それは、海斗が身に纏っていた衣類。スーツがハンガーに掛けられていた。海斗は何処に誰が居ても見つからないよう、気配を消してスーツに着替える。

「？ 新品みたいだな。ま、有り難く頂いておくか」

悪びれた笑みを浮かべ、身嗜みを整えた海斗は部屋から出る。

……病室から出ると丁度二人の少女と目が合う。

「……………」

「……………」

海斗と少女たちは硬直する。

硬直すること僅か0.7秒。海斗は二人の少女を交互に見据え、見つめられる二人はキョトンとした顔で、海斗を見る。

「……じゃあな」

海斗は無表情でそう言うとドアを閉めた。

さて、どう逃げるか。

ある意味、前門の虎、後門の狼の状態だ。病室からの脱出路となる正門は制服か、スーツを着た二人に塞がれている。

とつさに棒を取って塞いだが、ドスドスと叩く音がする。

そして室内には人は居ないが此処は二階。それも普通の一軒家の二階建ての家より高さがある。

「やっぱ飛び降りるしかない……」

“ドーンッ”

正面のドアが吹き飛ぶ。

おいおい。爆弾でも使ったんじゃないのか。海斗は呆れ顔で吹き飛んだドアを見た。そして、その原因を作った二人を見据える。

「どうして逃げるの」

「まだ病み上がりなんだから安静にしてないと」

茶髪と金髪の美人。

だが、茶髪は白い服装に赤いワンポイントと言って良いリボンを胸に飾られている。そして、金髪は黒い制服に白いマントを羽織っている。ただし、どちらも超が付くミニスカートであった。

「それは、コスプレか何かか？」

「コスプレじゃありません！」

「バリアジャケットと言って、戦闘服です」

「なるほど。戦闘服ね。……勝負下着とか云うアレか」

「「違います！」」

「冗談……」

海斗は誤魔化そうと動くも、金髪の少女に機械仕掛けの戦斧を向

けられた。

「貴男は何者ですか？ 出身世界とお名前をお願いします」

「物騒だな。しかし……出身世界だと？ なら此処はやっぱり地球じゃないのか？」

金髪の少女から発せられた質問に海斗は目を細める。茶髪と金髪は目を見開き、互いに顔を見合わせた。

海斗はそれを好機と見て、逆に問う。

「此処はどこだ。お前たちこそ何者だ？」

「……此処は第一世界ミッドチルダ。私たちは時空管理局所属の管理局員です」

茶髪の少女が海斗の問いにそう答えた。海斗は管理局の名を聞き、ある仮説を立てる。もしそうであれば……。

「時空なんちゃらってことは、地球で言う警察みたいなものか？」

「はい。簡単に言えば貴男の言った通りです。因みに時空管理局は、連なる次元世界の法と秩序を司る機関ですね」

海斗はそれを聞き神妙な顔つきに変わる。軽く腕を伸ばした。

対して、金髪の少女はキョトンとしたまま海斗を見ている。

「ふーん。じゃあ俺は、なおさら名を名乗れないな……」

「えっ？」

「少し寝てて貰うぞッ!!」

海斗は金髪の少女が構えている戦斧の柄を持ち、反撃に出れないように抑えた。

そして、空^すかさず一撃。それなりの威力を持つ拳がお腹の部分に打ち込まれる。

金髪の少女はまさか攻撃されるとは思わず油断していた。

そのため、戦斧。パートナーであるバルディッシュの警告に反応が遅れ、防御なしの直撃、重い一撃を貰う。

希釈な身体は地上から離れ、世界にある重力に引かれ背中から少女は倒れた。

「フエイトちゃん！ 貴男は……アレ？」

「人の心配より、自分の心配をした方が良いな。まあ、したところで意味があるかはわからないけどな」

「ッ！ はやい……」

消えたと思うと目の前に現れ、海斗は嘲笑うかのように冷えた口調で言い放つ。

「プロテク……『遅い——』キャアッ！」

桜色の何かが茶髪の少女の前面に構築される直前。それより早く、重い蹴りが少女を捉えた。少女は金髪少女の隣に勢いを殺せず転がった。

二人を昏倒させるには十分な威力を与えたが、意外にもタフらしく、倒れたまま苦悶の表情を浮かべていた。

海斗は、流石異世界の警察だと地球の警察と違いなかなか骨があると思いつつ、一別もせず病室から姿を消した。

海斗が病室から姿を消した後も、二人の少女は、痛みに身悶えし、未だ苦悶の表情を浮かべていた。

だが、彼を野に放ったままでは、彼も此処も危険であると判断し、必死に部隊に連絡を入れた――

その報告はすぐさま広まり、此处、機動六課全体に警戒態勢が引かれる。

次元漂流者捕獲作戦が施行された。

新設されたばかりの機動六課に青年、朝霧海斗は波紋を呼ぶ。
肉体ひとつで、彼はこの世界で日常的に扱われている異常に、無謀ながらも挑んでいく。

——魔法。

それは非科学的で幻想的なもの。
だが、この世界に置いて魔法は必要不可欠な存在である。

第03話「ベルカの騎士」(前書き)

今回の海斗。少しキャラが変わって見えるかも？

第03話「ベルカの騎士」

海斗は病室を後にし、今廊下を歩いていた。とりあえず、外を目指すも廊下は慌ただしく、なかなか下の階層に降りることが出来ない。

「気づくのが早いな。地球の警察だったらまだ遅いが……やっぱりあの二人か」

海斗は病室で倒れている二人の少女を思い出す。手加減はしたが、まだ動けるとは思っていなかったため、捨て置いたがそれが裏目に出たようだ。

海斗は現れるごとに倒して行けば済むと考えていたが、金髪の少女が持っていた機械仕掛けの戦斧と、あのロボットたちが撃つて来たレーザーが重なる。

（もし、あんなのが使える奴が複数いたらタダじゃ済まないな）

海斗は慎重に息を潜め、気配を消しながら移動を再開した。なるべく戦闘を控え、出口を目指す。

S i d e 八神はやて

私は謎の青年を捕獲するため管制室で指揮を執る。しかし、なんや。

新設したばかりにこんな事件が起こるやなんてツイとらん。

それも、同じ地球出身者らしくておまけに次元漂流者。加えて滅

茶苦茶強いと来た。何なんやもうッ!!

「グリフィス君。見つかった？」

「いえ。何度防犯カメラで確認してもそれらしい人影は……」

どう言うことや。防犯カメラに姿を映さんやなんて。

なのはちゃんとフェイトちゃんが助けたのは暗殺者か、何かの類アサシンの人物なんかね？

だけど、そうやったとしても、どうして二人に攻撃して逃げるんや？

普通、お礼を言うのが当たり前やろ！　なのに恩を仇で返すなんて――

絶対捕まえてやるから覚悟しとき!!

六課の部隊長、八神はやての心に小さな灯し火が点火した。

S i d e E n d

はやての内にある静かなる闘争心に火が点いた頃、海斗はようやく二階に辿り着いた。

「何なんだ此処は？　まるで二階堂家みたいな迷路だな」

なるべく戦闘を避けながら二階に来たものの、海斗にとって此処は広すぎた。現在、絶賛迷子中である。

「地図ぐらい作れよ」

『居たぞ！　侵入者だ――』

「ああ、糞ッ！　次から次へと」

三階からの追っ手が現れる。

海斗は急ぎ、二階の廊下を駆けるが此処は直線ルートしかなく、隠れる場所がない。まさに絶対絶命のピンチ。なのだが、消火器を見つけそれを割る。

それを煙幕代わりに局員たちの横をすり抜け、一気に駆け抜けた。

次の階段まで辿り着いた海斗。

だが、そこに立ち塞がる女性がいた。

ピンク色の長髪をポニーテールに騎士更衣を身に纏う剣士。閉じていた瞳が開き、海斗を見据える。

「貴様が次元漂流者か？」

女性から発せられるには穏やかではない、威圧的な言葉で訊ねられる。海斗は息を呑む。目の前の女は強いと。

多分、近接戦闘で力を発揮する人間だと認識する。そして、誤魔化しも効かないだろうとわかっていた。

だからこそ、海斗は腕を構える。

「ああ。この件に関わりがある人間だ」

「そうか。ならば、此処を通す訳には行かないな」

「ならばっ倒して先に進むだけだ」

海斗の悪の血がたぎる。

久しぶりに死合うことになる女を見て、海斗の心は震えた。こいつを屈服させれば、俺は更なる高みへと昇華出来ると。

そして、その際に女から感じた死臭。それは俺と同じ、人を殺し

たことがある人間だとピンと来た。

だが、戦場の数が違い過ぎる。

俺と奴では差が歴然だ。しかし、簡単には――

「来いよ」

「烈火の騎士シグナム。出る！」

海斗は向かって来るシグナムと言う女を見据える。相手の獲物は剣。機械仕掛けの剣と言ってもその威力は計り知れない。

尚且つ、昨日のあのレーザーに病室のドアをぶっ飛ばした爆発。どれも機械が関係していた。だからこそ、一番に注意しておくべき点は剣だ。

海斗はシグナムを太刀を避ける。軌道を正確に読むが、彼女の一太刀、一太刀は薫に匹敵する。もしくはそれ以上だった。

「返しは早いが避けない太刀じゃない」

「っ！？ 貴様、なかなかやるな」

「それはお互い様だ。けどな負ける気は気ほどもないぜ」

「それは私とて同じこと――レヴァンティン」

シグナムの声帯に反応するように剣が鈍い輝きを放つ。海斗はそれを見てシグナムから離れる。

そして、再度剣を見ると刃に炎が纏う。一瞬その光景に目を見張るが、この世界の異常性に順応し始めた海斗はさほど驚くことはなかった。

次の一撃に備え、構え直す。

「紫電一閃！」

しかし、彼女の一撃は海斗が構え直すより早く放たれた。シグナ

ムは獲ったと、手応えを感じたが、振り抜いた先に海斗の存在はなかった。

「あぶねえ。今のをマトモに喰らったら死ぬぞ」

「貴様——」

横に転がり、海斗はシグナムの一撃を回避していた。しかし、シグナムは海斗の異常に気付いていなかった。

（片腕が逝ったか……ちっ）

海斗は禁止区域で鍛えられた生存本能から今の一撃の直撃を避けることが出来たが、少し回避が遅れ左腕の骨が逝っていた。

海斗は唾を吐き、シグナムの目を見る。シグナムと海斗の目が交錯した時、シグナムの背筋に悪寒が走る。

プレッシャーと言っても良いほどの恐怖を覚える。

（何だ……奴のあの目は——）

目を合わせただけでまるでネズミになった気分を味わう。一歩間違えれば、死をも脳裏に浮かんでしまう。

数多くの戦場に立って来たがこれほどまでに恐怖を覚えるのは、リインフォースと死合った時や戦場での数度しか体験したことはない。

「貴様から死臭がする」

「奇遇だな。俺もあんたからそれを感じた」

「「……………」」

互いにもう言葉は入らなかった。

今はこの闘いを楽しむことに意識が向いていた。海斗は立ち上がり、シグナムは剣を構え直す。

「貴様、名を何と言う？」

「今から死合うと相手に名前を聞くか」

「私は貴様の名を知りたい。それにこれは死合いではない。試合だ！」

「試合、ね。……俺の名前は朝霧海斗だ」

「朝霧海斗か。良い名だ。私の名前はシグナム。そしてこれは相棒のレヴァンティンだ」

互いに名を名乗り、構える。
刹那の時、

「ハアアアッ……！」

同時に駆け出す。

拳と剣。どちらに分があるか。

——遂に決着が……。

『バインド！』

「「ッ!？」」

二人は白い環に捕縛される。

海斗は何だと力を入れるが粒子の環を破ることは出来ない。対してシグナムは冷や汗を掻いてジッとしている。

「シグナム？ 私は捕縛を命令したよなあ。なのにどうやって地面が抉れたり、窓ガラスが割れてんやろうね？」

二人の前に茶髪の少女、八神はやてが降臨した。その後、にこやかな笑みを浮かべたはやてにシグナムは捕獲されたまま説教されることに。

そして、今回の事件の発端である海斗は蚊帳の外で、はやてとシグナムのお話を横目で眺めていたとかいなかったとか。

第04話「機動六課」

「手錠ね……」

両手に填められた手錠を感慨深く見やる海斗。茶髪とピンクの髪の毛から前後を取られ、ある部屋に連れて行かれた。

部隊長室。茶髪の少女はそう海斗に伝える。入って見れば、どこかの社長がふんぞり返っていて良いような広い部屋。

ソファもあり会合が出来るよう設備が整っている。

「まあ、腰掛けてや。シグナムは向かい合うようにお願いするで」「監視ということか？」

「そういうこと。あんたは肉体ひとつで私たちを手玉に取ったんやから」

両手を顎に当て、真剣な眼差しで海斗の言葉に頷く茶髪の女。海斗は手錠と向かい合うピンクの女を見て、ため息を吐く。

「聞きたいことがあれば手短かに頼む。だが、答えられる範疇でならで、だけどな」

そう頷く。

だが、捕まっていながらも有利に立とうとしている。

彼の瞳の色だけは違った。どこまでも鋭く。尚且つ、死んでいない。

シグナムはその瞳に脅威を覚える。今まで立ち会って来た犯罪者や何度か出会った次元漂流者達とは全く違う。

未知なる存在。奴はまだ、諦めるどころかこの場から逃げおおせるところにいる。

しかし、それには茶髪の女は気づいていない。

「案外素直な性格みたいやね。さっきまで此処で暴れてた人と全然違う」

「そうか？ まあ、如いて言うなら此処に順応したからじゃないのか？」

「……じゃあまずは自己紹介からや」

「ツツコミがねえー！」

海斗はスルーされたことに吼える。

まさか、ツツコミがないとは思わなかったため、上体がソファーに寝転がるように倒れた。

茶髪の女は驚くが気にせず話を進めた。

「私の名前は八神はやて。此処、機動六課の部隊長を務めとる。次はシグナムやで」

「あ、はい。私の名前はシグナム。主八神はやてに仕える守護騎士にして、ライトニングの副隊長を務めている」

「私たちの自己紹介はこれで良いかいな。じゃあ次は、貴男の自己紹介をお願いするわ」

はやてとシグナムは海斗を見据える。未だに寝転がったままだが、むくつと上体を起こし口を開く。

「わかった。俺の名前は朝霧海斗。至って普通の地球生まれで一般庶民だ」

人を小馬鹿にするような態度で告げた。シグナムはその態度に剣を抜こうとするが、はやてに止められる。

「シグナム。……で、地球出身はわかった。けど、一般庶民って言うのはあり得んやら？ モニターで監視してたんやけど、……朝霧君で良いんやろうか？」

「朝霧でも海斗でも構わない」

「じゃあ海斗君と呼ばして貰おうかな？　それで、ひとついいやろうか。私は不思議に思えてならんや。海斗君の姿がシグナムとの戦闘と病室での映像でしか映っとらんかった」

「……………」

「それに加えてその身のこなし。軍隊か何かに入ってたんか？」
「……………」

海斗ははやての説明に無言を強いる。

瞳と瞳がぶつかり合うが、海斗の瞳に動きはなく、何も読み取れない。

はやては内心焦る。初めてぶつかる存在。未知との遭遇。そう喻えるべき相手、朝霧海斗。逆に自身の背筋は冷や汗ものである。彼から放たれる存在感に飲み込まれる。あと少し、揺さぶられれば危険だ。

（何なんや……この子。初めてのパターンや。ここまでリズムが崩されるなんて）

はやては内心で愚痴を零す。

その刹那、背筋がゾツとする。

その違和感はシグナムも同じのようで、違和感の正体を見据える。その正体は朝霧海斗。

彼ははやてとシグナムを交互に見据える。ただそれだけと言うのに心を読まれているような気がしてならない。

しかし、海斗はため息を吐き口を開いた。

「ああ、確かに一般人は語弊があるな。俺はボディガード候補生だ」

「……ボディガード候補生？」

「要人を護衛するために作られたボディガード育成学校。その学生だ」

海斗はそう告げると再び口を閉じる。はやてはその言葉を聞き、あることが思い出す。ボディガード育成学校……。

「海斗君。もしかしてそれ、暁東市にある憐桜学園のことやないんか？」

「知ってるのか？」

「まあ、あそこは資本家がたくさんいる街やからね。あ、そうやったな。私は地球の海鳴市に住んでたんよ。今は此処、ミットガルドに住んどる」

はやては柔らかな笑みを浮かべる。

先ほどまでは海斗に焦りを浮かべていたが、今はそこまでなかった。どちらかと言うと話しやすくなったと言った方が良い。だが、シグナムだけは警戒を怠らない。

海斗ははやての言葉に食い付き更に訊ねる。

「なら、俺は暁東市に帰れるのか？」

「あ、うん。帰れるで。もし違う未発見の次元世界やったら難しかったんやけど、私と同じ出身の地球なら大丈夫や。けど今は此処で起こした件が片付けてからやけど」

「……条件は何だ？」

海斗は低い声で訊く。

ものわかり、と言うより自分が仕出かしたことは重々承知してい

るようだ。早速本題を話せとせがむ海斗。

「そうやな。怪我人は特に居らんかったから、とりあえず事後処理を。あとは、ボディーガード候補生と言うことはなかなか強いってことやろ？　なら、うちの部隊の若手を鍛えてくれへんかな？」

「それだけで良いのか？」

「うん。それで良いよ。ただ、次元船の関係上期間は二週間やけど……」

海斗はその提案に一度考え込む。

しかし、海斗は暁東市に戻って俺はどうする？　と思案する。

期間は二週間だとコイツは言った。

二週間後、戻ったとしてもあの法案は決行された後だ。俺に居場所はない。それに杏子も助けられない。

いや、彼奴が捕まっている保証もない。もし捕まったとしても逃げおおせたかもしれない。なら俺は——海斗は決断した。

「いや、やっぱり良いや。俺を此処に置いてくれないか？」

「「はっ？」」

はやてとシグナムはその回答に目を丸くする。故郷に帰れると言うのに帰りたくない。そんなことを言う漂流者は初めてであったからだ。ましてや此処に置いて欲しいと願う出る。

「どうしてなんや？」

「俺には両親はいない。それに暁東市に戻ったところで憐桜学園への復学は難しいだろう。何たって出席日数が足りないからな。それに……」

海斗は当たり障りないよう説明していく。どれも事実だがある程度ばかす。

学園の復学は絶望的。何たって薫を助けるためにかなりギリギリまで休んでいたのだから。それに今は夏休みだと言っても、海斗は勝手に屋敷を飛び出した身。

屋敷には亮と言う海斗の存在を知る人物がいる。今頃、麗華たちに海斗のことは知れ渡っていることだ。

それを加えて、国が出した法案決行。これにより、帰ったところで捕まるのも時間の問題だった。

それに、元は杏子を助けるために屋敷を飛び出したのに、こんなところで足止めを食らう。ならばいっそ、と。

だからこそ、海斗は此処に残ることを決断した。

はやては海斗の話を聞いて理解する。確かに、彼は戻っても悪く言えば路頭に迷うことになる。

両親は居らず天涯孤独。

護衛対象の屋敷に今は暮らしているが、その父親が彼を追い出そうと画策している。尚且つ、学園の出席日数は厳しいと来た。もし出席日数が足りたとしても、二週間も何処にいたのかと問い質され、挙げ句は追い出される可能性がある。

だがそれには信憑性が薄い。事実かも知れないが微妙な線だとはやては考える。

（シグナム。彼の言ってることは事実やと思う）

（そうですね。朝霧は嘘は言っていないと思います。ですが……）
（ですが？）

（いえ。私の思い違いだと思います。それに朝霧の意図を組んでも我々には害はないかと。それどころか……）

シグナムは戦闘の際に交わした言葉を思い出すが、振り払う。確かに朝霧海斗は恐ろしい。だが、こうして話して見れば無害に思えてならず、シグナムははやてにそれを伏せた。

そして、海斗との戦闘の際での立ち回りについてははやてに話す。魔法に肉体ひとつで挑み、互角以上に張り合ってきたことを。

また、海斗は本調子ではないことにシグナムは気づいていた。しかしながらそれについても語らなかった。本調子であろうとなかろうと、まだ全力ではない。シグナムはそう思っていた。

自分自身もまだ全力ではなかった上、リミッターがあるから本気とまでは行かないが、奴は実力を合わせてきた。シグナムはそう考える。

負けることはないだろうが、朝霧海斗の実力は本物であると本能が理解していた。

はやてはシグナムの話を聞き海斗に興味を持つ。それほどの実力があるなら戦力になる。しかし、如何せん彼はリンカーンコアがあるかがわからない。

そこであることを閃く。これなら――

「なあ、海斗君。少し検査しても構わんか？」

「何の検査なんだ？」

「健康診断みたいなもん。まだ体が万全やないんやろ？」

はやての言葉に海斗は身体に力を入れる。さっきまでは確かに思うように動けたが、今は体が少し怠い。熱も少しあるみたいだった。海斗ははやての指示に頷く。

「じゃあ、検査の後にこの件はもう一度や。それに会わせたい人も居ることやしね」

「わかった。たが会わせたい人？」

「海斗君が気絶させた女の子二人や。よく、謝っておくんやで？」

はやてはジト目で海斗を睨んだ。対して海斗はバツの悪そうな顔で頷いた。

第05話「次元漂流者」(前書き)

スランプ気味みたいで描写に違和感ありまくりです。

申し訳ございません。何度か修正するかと思いますのでよろしくお願ひします。

第05話「次元漂流者」

海斗side

病室で簡単な検査を済ませると診察側から驚かれた。何でも熱が38度9分あるとか。そんな状態で平然に動いていた俺は、もう二日はベットで安静にしてなさいと金髪の女に言われた。

名はシャルと言っていた。何でもはやてを守護するひとりで回復魔法のエキスパートらしい。

というより魔法なんてあるんだな。世の中広すぎるわ――

「はぁー、暇だ」

シャルの魔法により身体の状態は良好だが、如何せん暇すぎる。病室から抜け出せば先ほどの繰り返し。

そのため手錠を嵌められたままである。

「俺はどここの犯罪者だぁー!」

ひとりツツコミが寂しすぎる。

こう言う時に読書が打ってつけなんだが、ここの文字は奇抜過ぎて読めない。

とりあえず、はやてから貰った日本語で書かれた文学書やらノベル、なにわ探偵シリーズを借りた。まさか、はやてがなにわ探偵シリーズを集めているとは……。

「やはり狸」

（誰が狸やねん!）

「うおっ! はやての声か。……と、そんな気がしたけど気のせい

だろう」

俺はなにわ探偵シリーズ、怪盗Yとの初邂逅のシーンを読んでいた。

しかし、何度読んでも不思議だ。何故Yは白面ペルソナで顔全体を隠すんだ？

普通なら鼻から上を隠すものが多いと言うのに……。

海斗side end…



海斗がなにわ探偵を読み始めた頃、部隊長室に茶髪のポニーテールと金髪のロングをした女性二人がはやてと会合していた。

「はやてちゃん。あの男の子はどうしたの？」

「私たちが治療を終えた頃にはもう捕まえてたんだよね？　なのに、どうして会わせて貰えないのかな、はやて？」

表情は和らげなのに対し、言葉はどこか棘棘しい物言いだった。

これにははやても小さくなるばかりで、冗談を言える状態ではない。

「えーとな。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「「何かな？」」

「な、何でもあります!」

はやてはなのはとフェイトのぎらついた目に恐怖を覚え、敬礼した。すぐさま、海斗についての説明に移る。

また、これを見た局員たちは呟くことだろう。流星は魔王と死神だ、と。

数十分後。

幾つかの説明を省きつつ朝霧海斗についてははやては話し終える。

「え?　じゃあ高熱で朝霧君は私たち二人を抑えたって言うの?」

「そう言うことや」

「だけど……」

「なのはちゃんが言いたいことはわかる。けど、あのシグナムにまで普通に対抗してたんや。加えて初見の魔法すら回避するなんてありえへん。それにこれは一昨日の監視カメラに偶然映ってたものなんやけど」

はやてはそう言ってモニターに映像を映す。そこにはなのはとフェイトが海斗を助けた場所が映っていた。

六課の敷地内には幾つかの場所に監視カメラが設けられている。不審者や緊急事態に備えてのものであり、ガジェットの侵入の際にも防犯設備がいち早く察知したため惨事を防ぐことが出来たと言っ
て良い。

その内のひとつが奇跡的に海斗を映し出していた。

その映像は素手で三機のガジェットを圧倒する構図が映っており、光線を避けては木々を楯にしガジェットを確実に仕留めていった。

なのは、フェイトはその光景に声が出ず、はやては頷くのみだっ

た。

「本当に身ひとつで倒しちゃってる」

「凄い…。と言うよりこれが人に出来る芸等なの？」

「私もそう思うよ。けどなのはちゃんのお父さんや恭也さんも人にしては桁外れや」

映像を見終えると各自感想を述べる。はやてに至ってはなのはの家族を例に挙げた。なのはもそれには同意する。

「お父さんもお兄ちゃんも確かに強いよ。けど、剣士としての話だよね」

「そうやな」

「だけど、彼の場合は拳士として。それにお父さんたちより遥か高みにいると私は思うよ」

それがなのはの率直な感想だった。

魔導師になって幾多の闘いに身を投じて来たなのはだから言える父と兄の強さ。

魔法を持っても本気のあの二人勝てるかわからない。

シグナムさんも言っていた。あの二人は強いと。そして、今回の彼はまさに人外の領分にいる。

フェイトもはやてもなのはの言葉に息を呑む。

「士郎さんに恭也さんの上って……」

「けど、確かにそうなんや」

「はやて？」

「フェイトちゃん。シグナムも同じ結論やったんよ」

「シグナムも」

フェイトの言葉にはやては頷く。

「海斗君をシャルに預けた後なんやけど……」



「主はやて」

私とシグナムが海斗君を医務室に連れて行った後、シグナムが神妙な顔付きで私の名を呼んだ。

「どうしたんやシグナム」

「いえ。少々主にお話ししておきたいことがあります——」

そう言う私を医務室から少し離れた部屋に連れて行った。
どうしたんやろ？と私は疑問を覚えつつシグナムの話を聞く。私はその話を聞いて耳を疑った。

「どういうことや、シグナム!？」

「私の憶測なのですが朝霧は人を殺したことがある、と思います」

私はそれに目を見張る。

確かに彼は強い。シグナムを圧倒しつつあった。リミッターがあると言えど、なのはちゃんやフェイトちゃんのように気を許していた訳やないけど、シグナムを圧倒した。けど、人を殺すような——

「それは憶測なんやな？」

「はい。ですが、奴は私たちと同じ臭いがします。ひとりの士として、これまでの経験から」

そう私にシグナムは忠告した。

◇

「シグナムさんがそんなことを？」

「私は違うと思うんやけどな」

「私もそう思うよ。あの人が人殺しなんて。なら何で私となのはが生きてるのかってなるし」

三人は悩む。

今回の次元漂流者に。地球出身の彼の存在に。朝霧海斗は一体――
そして、三人は知らなかった。部屋の扉が少し開いていたことに
……。

◇

室内で朝霧海斗は笑っていた。

「くっくく。俺が人殺し？　言い得て妙だがある意味正解だな」

部屋から抜け出した海斗ははやてに読んだ本を返しに行ったのだが、丁度三人の話を耳にしてしまい、部屋へと戻った。

「やっぱり、暁東市に帰るまでは現状維持が一番みたいだな。流石に魔導師とかいうのがどれだけいるかわからない。加えて暁東市に帰る方法は彼奴らが握っている……。杏子——」

海斗はこれからの此処での生活を見据えながらベットに寝転がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4726p/>

交錯する魔法と護衛

2011年2月3日05時19分発行